

めざす児童生徒像

- ① いのち・・・挑戦する力 ～向上心を持ち、粘り強くチャレンジする子～
- ② まなび・・・発信する力 ～身につけた学びをアウトプットし、共に高め合う子～
- ③ えがお・・・実行する力 ～よりよい学校・学級のために考え、選択・決定し実践する子～

※児童生徒結果－教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
組織的な学校運営 (学校で設定)		①の肯定的な評価が80%以上	① ロードマップやカリキュラムマップを活用し、学校経営計画の実現に向けて、主任を中心に職員が連携しながら、共通理解し、共通実践に努めている。	100			100			①肯定的評価：A評価64% B評価36% 企画委員会や校務分掌部会を中心に、各学年や各分掌等の取組状況を共通理解し検証してきた。また、その検証結果から、取組内容を改善し共通実践できるよう工夫してきた。それにより、A評価の割合が伸び、特に若手や中堅教員の意識が高まったことに繋がっていると考えられる。	主任層を中心に、PDCAサイクルを回すことの意識は高まっているが、企画委員会等でのロードマップの十分な活用には至っていない。企画委員会の時間設定等も含めて改善していくことは一つの方法と考える。また、若手や中堅教員一人一人がさらに学校運営に参画していることを実感できるよう、業務の分担をより明確にしていくことが必要と考える。
				集計							

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
働き方や業務の改善 石川県共通重点項目		①②の各項目の肯定的な評価が85%以上	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	86			100			①肯定的評価：A評価57% B評価43% 中間より、A評価の割合は高くなり、肯定的評価も100%になっている。定時退校日を呼びかけ、働き方を考える意識ももてるようになったと考える。一方、中間よりB評価に下がった職員もいる。2学期より組織体制が変わったり、学年行事等も含めて事前の準備や打合せが増えたり、生徒指導対応に時間がとられたりしたことは要因の1つと捉えている。 ②肯定的評価：A評価46% B評価54% 若手教員を中心に、A評価の割合が増えている。教職員一人一人が自分の業務を自覚しながら取組を進めていると捉えている。主任層が連携の意識をもち、関わっていることも成果の1つと考える。	①月2回の定時退校日を意識し、見直しをもった業務の取組を意識できるように働きかけていきたい。また、日課の見直しや業務の精選でできることがないかを考えていく。 ②今後も、主任層や中堅・ベテラン教員を中心に、若手教員の育成を意識できる組織づくりに努める。その中で、すべての教職員が自分の役割を自覚し、組織に貢献できていることを実感できるよう、管理職や主任層からの声かけ等を継続していく。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができている。	93			100				
集計											

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
学校研究		①②の各項目の肯定的評価が90%以上	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	100			100			①計画訪問での助言から、目指す授業スタイルを改善し、「ちょいすご授業」の中に個人思考の時間を取り入れるようにした。部会授業では、どの授業も個人思考からの交流となっており、目指す授業スタイルが定着してきている。 ②部会授業の整理会では、児童の様子から、授業の改善点を考え、別の授業者が再度同じ授業を実施した。課題から改善策を考え、実践できた。	①年度途中の授業スタイルの変更があったため、個人思考から交流への判断が教師主導となっている。来年度は、児童と流れを再度共有し、繰り返し実践していくことで、児童が自分で判断し交流できるようにしていく。
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	100			100				
集計											

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善 小松市共通重点項目		①②⑤の各項目の肯定的評価が中間…85%以上 年間…90%以上	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100	95	-5	100	94	-6	①②⑤の項目で目標は達成している。 ・学校評価とは別の学習アンケートでも前回のアンケートとほぼ変わらない高い数値であった。 ・単元構想シートを用いて学習計画を立て、児童と共有していることが学習の見直しにつながり、①の肯定的評価が高いことにつながっている。 ・交流の目的を児童に伝えたり、交流での話し方を示したりと話し合いを通して考えが深まるようにしていることが、②の肯定的評価が高いことにつながっている。 ・振り返る視点を示し、自己の学びと成長を自覚させてきたことや、ICTを用いて友達の振り返りを参考に振り返る力を高めてきたことが、⑤の肯定的評価が高いことにつながっている。 ・⑥については、ICT機器を用いた振り返りに取り組んだことや授業にICT機器を取り入れようと教員がチャレンジしたことが数値の向上の要因である。	・①②⑤については、これまでの取組を継続し、実践していく。⑤の振り返りについては、内容が充実してくるとともに、時間も必要となっており、時間配分を考えていく必要がある。 ・③の項目で肯定的評価が低くなっている。ICT機器を用いて課題をまとめることが増えてきているため、資料や文章を工夫する必要性が高くなっている。その分、難しさを感じる児童が増えているのも一つの要因であると考え。個々に発表する機会を利用し、発表する力をつけていく。
			② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。	100	94	-6	92	91	-1		
			③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	85	92	7	100	88	-12		
			④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	85	93	8	92	91	-1		
			⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	86	93	7	92	91	-1		
			⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	57	96	39	85	99	14		
			集計								

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
カリキュラム・マネジメント 学力の向上		①②③の各項目の肯定的な評価が90%以上	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	93			93			①～③の項目において、目標を達成している。 ①肯定的評価A評価31% B評価62% ②肯定的評価A評価31% B評価69% ③肯定的評価A評価54% B評価46% ・③に関しては、A評価が36%→54%に伸びた。学力向上の取組のセルフチェックシートの活用が、共通実践につながったと考える。 ・①②に関しては、肯定的評価のA評価よりB評価の割合が多い点が課題である。A評価が増えるような取組を考えていく。	・①に関して、来年度に向けてカリキュラムマップの見直しを教科横断的な視点で行っていく。 ・②に関して、11月に学力向上の取組についての検証方法を各教科で検討し、実施した。今後は、検証結果を分析し、課題から改善策を考え、取り組むなど、PDCAサイクルを回していく。
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	93			100				
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100			100				
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	92			92				
			集計								

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)			数値・アンケート結果 (%)				
				教員	児童生徒	保護者	教員	児童生徒	保護者		
学習方法		①の肯定的評価が80%以上	① 児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動を行っている。	93	95	2	100	96	-4	①目標を達成している。 効果的な場面に「ちょいすご授業」を設定できるように考えながら授業に取り組んでいることが要因と考える。 ②目標を達成している 教員らによる新たなICT環境への挑戦によるものや、ICTを活用した他者参照が自分の学習の調整に役立つことだと児童らが実感し活用したことが要因と考えられる。	・②の項目では引き続き、多様な教科や活動におけるICT活用の可能性を見出し、職員同士で情報共有することでGIGAスクール構想のさらなる推進を目指す。
			② 児童生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面では、児童生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を活用している。	71	85	14	92	95	3		
集計											